

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第33集

賢木岡東遺跡

2019

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第33集

かた ぎ おか ひがし い せき
賢 木 岡 東 遺 跡

2019

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、原始・古代の集落跡等の埋蔵文化財が数多く分布することで知られています。こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。

しかしながら、近年においては、多くの開発行為に伴い、我々の郷土の景観は日々変化しております。このような現状の中で、失われつつある文化財を保護し、それらを次世代に伝えていくことは我々の大きな課題であり、責務であるはずです。

さて、今回報告する賢木岡東遺跡は、熊谷市冑山地内に所在する縄文時代から平安時代の遺跡であります。過去に旧大里村教育委員会による発掘調査が実施され、当時の人々の生活が分かるものが成果として確認されております。

この度、この遺跡の一部で集合住宅の建築工事の計画が持ち上がりました。熊谷市教育委員会では、遺跡の保護と保存についてその関係者との間で協議を重ねた結果、熊谷市教育委員会で記録保存のための措置を講ずることとなりました。

本書は、平成29年4月27日から同年6月1日にかけて実施された記録保存のための発掘調査の成果をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を御理解、御協力を賜りました加藤 劭氏、並びに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市冑山字賢木岡東 157 番 2 に所在する賢木岡東遺跡（埼玉県遺跡番号 64-045）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査届出に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、平成 29 年 4 月 27 日付教生文第 2－5 号である。
- 3 本調査は、集合住宅建設に伴う事前の記録保存のための発掘調査であり、熊谷市大里地区遺跡調査会を設立し、調査会が実施した。また整理作業については熊谷市教育委員会が作業を行った。
- 4 本事業の組織は、I 章のとおりである。
- 5 発掘調査期間は、平成 29 年 4 月 27 日から平成 29 年 6 月 1 日である。
また整理・報告書作成期間は、平成 30 年 4 月 2 日から平成 31 年 3 月 27 日までである。
- 6 発掘調査は腰塚 博隆が行った。
本書の執筆・編集は熊谷市立江南文化財センター内作業員の協力のもとに腰塚 博隆が行った。
- 7 写真撮影は、発掘調査、遺物は腰塚が行った。
- 8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 9 本書の作成にあたり多くの方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。

（敬称略 五十音順）

埼玉県教育局生涯学習文化財課
根岸 友憲

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

S D…溝跡、S K…土坑、P…ピット、S X…性格不明遺構

- 2 遺構図面中の表記記号は、次のとおりである。

S…川原石（※土層表記中、指摘のないものは遺物を表す）

- 3 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図… 1/150、各遺構…1/30（谷状遺構のみ 1/120）

- 4 遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、原則として同一図版、同一遺構の標高は統一し、Aポイントに表記した。なお、例外的に標高差が大きい場合は、統一せずその都度表記してある。

- 5 遺物実測図の縮尺は、1/4 である。ただし、一部においてはその限りではない。

- 6 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。

表現方法は、原則として須恵器のうち還元焰焼成の断面は黒塗り、須恵系土師質土器（酸化焰焼成）は表記を土師質土器とし、断面は白抜きで、灰釉陶器以外の土師器等の土器、その他の遺物の断面は白抜きで表した。

底部調整については、回転糸切りは α で表した。

- 7 遺物である礫のうち、敲打痕があるものは、「 $\triangleleft$ — $\triangleright$ 」がその範囲を、擦り痕があるものは「 $\blacktriangleleft$ — $\blacktriangleright$ 」でその範囲を示した。

- 8 挿図中の遺物番号は、遺物実測図及び遺物観察表の番号と一致している。

- 9 土層断面のうち一部は、平面図中の遺構を省略している場合がある。

- 10 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm である。また、推定値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

A…白色粒子、B…黒色粒子、C…赤色粒子、D…褐色粒子、E…赤褐色粒子、F…白色針状物質、
G…長石、H…石英、I…白雲母、J…黒雲母、K…角閃石、L…片岩、M…砂状、N…礫
O…金雲母

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2010 年版）に照らし最も近似した色相を示した。

目 次

序	2 調査の方法……………8
例 言	3 検出された遺構と遺物……………8
凡 例	IV 遺構と遺物……………9
目 次	1 溝跡……………9
I 発掘調査の概要……………1	2 土坑……………13
1 調査に至る経過……………1	3 ピット……………17
2 発掘調査・報告書作成の経過……………1	4 谷状遺構……………21
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織……………2	5 性格不明遺構……………23
II 遺跡の立地と環境……………3	6 遺構外出土遺物……………26
III 遺跡の概要……………8	V 調査のまとめ……………28
1 賢木岡東遺跡について……………8	

挿 図 目 次

第1図 埼玉県 の地形図……………2	第12図 ピット (第1～12号ピット)……………18
第2図 周辺遺跡分布図……………4	第13図 ピット (第13～23号ピット)……………19
第3図 調査地点位置図 (賢木岡東遺跡)……………6	第14図 ピット (第24～27号ピット)……………20
第4図 調査箇所全測図……………7	第15図 ピット出土遺物……………21
第5図 溝跡 (第1、2号溝跡)……………10	第16図 谷状遺構……………22
第6図 溝跡 (第3、4号溝跡)……………11	第17図 谷状遺構出土遺物……………23
第7図 溝跡 (第3号溝跡 土層断面)……………12	第18図 第1号性格不明遺構……………24
第8図 溝跡出土遺物……………13	第19図 第1号性格不明遺構土層断面……………25
第9図 土坑 (第1、3、4号土坑)……………14	第20図 第1号性格不明遺構出土遺物……………25
第10図 土坑 (第2、5、6号土坑)……………16	第21図 遺構外出土遺物……………27
第11図 土坑出土遺物……………17	

挿 表 目 次

第1表 溝跡出土遺物観察表……………13	第5表 谷状遺構出土遺物観察表……………23
第2表 土坑出土遺物観察表……………17	第6表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表……………26
第3表 ピット一覧表……………17. 20	第7表 遺構外出土遺物観察表……………26
第4表 ピット出土遺物観察表……………21	

図 版 目 次

図版1 調査区全景 (南西から) 谷状遺構B-B' 付近 (南東から)	図版3 第8図2-1、3-1・2・3、4-1 第11図1-1・2、4-1 第11図4-2 第17図1～8 第20図1～7 第21図1～8 第21図9～15 第21図16～18
図版2 第1号土坑 土取り遺構 (西から) 第1号性格不明遺構 土層断面 (南東から) 第3号溝跡 (西から) 第1号性格不明遺構 (西から) 谷状遺構 手前部分 (北西から) 第1号性格不明遺構 土層断面 (南東から)	

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成29年1月6日付けで、加藤 勲氏から埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。開発の内容は集合住宅建設工事であった。

熊谷市教育委員会は届出を受けて、同年1月16日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下34～49cmの深度から縄文時代中期、及び古墳時代後期の遺構、遺物などの埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を加藤 勲氏に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更をしない方針となったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

そのため、熊谷市教育委員会では熊谷市大里地区遺跡調査会（以下、調査会）を設立し、発掘調査をその調査会が行うこととなった。

発掘調査は、調査会から、平成29年4月18日付熊大発第2号で、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、平成29年4月27日から開始された。

なお、埼玉県教育委員会から、調査会あてに平成29年4月27日付教生文第2－5号で発掘調査実施の指示通知があった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成29年4月27日から平成29年6月1日にかけて行われた。調査面積は、287.6㎡であった。

まず、遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。表土が剥ぎ終わったのち、遺構精査作業を行った。その際、谷跡、溝跡、多数の土坑、ピットなどが確認され、順次遺構の調査に着手した。

調査箇所的位置する地形は東西の高台に挟まれた谷状地形となっており、調査箇所自体も、その傾斜地に位置することから、傾斜地でのバランス感覚などに苦慮しながらも、最終的に平成29年6月1日、調査のすべてを終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理作業は、平成30年4月2日から始めた。まずは、遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後11月までに順次、遺物の実測、拓本取りを行った。12月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、2月下旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月27日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市大里地区遺跡調査会

主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

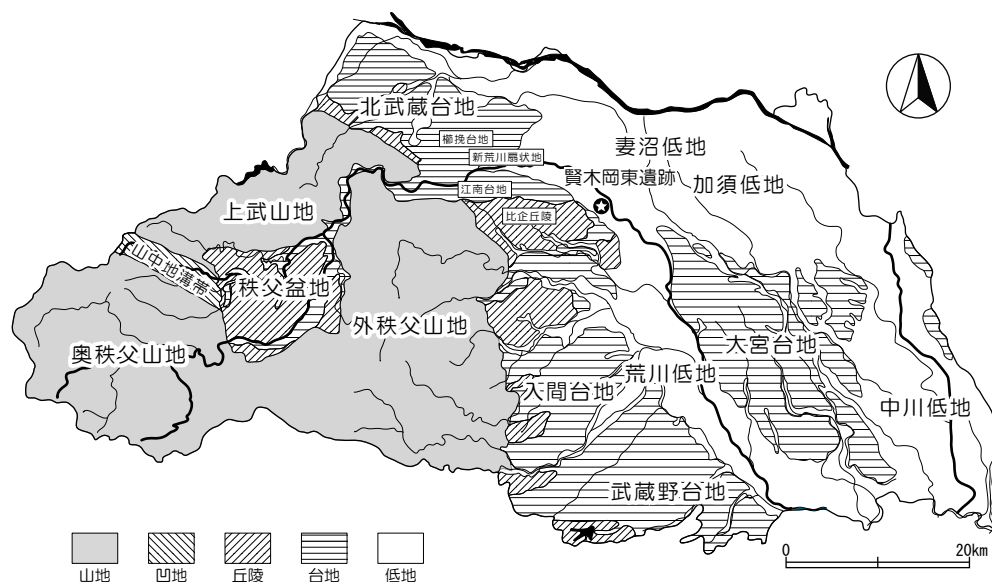
平成 29 年度

会 長	野原 晃
副 会 長	正田 知久
事 務 局 長	鶴田 敏男
事務局次長	吉野 健
統括調査員	新井 端
調 査 員	松田 哲
調 査 員	小島 洋一
調 査 員	蔵持 俊輔
調 査 員	腰塚 博隆
調 査 員	山下 祐樹
嘱 託 職 員	山崎 和子

(2) 整理・報告書作成

平成 30 年度

教 育 長	野原 晃
教 育 次 長	小林 教子
社会教育課長	鶴田 敏男
社会教育課担当副参事	吉野 健
主任兼文化財保護係長	松田 哲
主 査	星 祥子
主 査	小島 洋一
主 査	蔵持 俊輔
主 任	山下 祐樹
主 任	腰塚 博隆
主 任	新井 端
主 事（任期付任用職員）	武部 喜充
主 事（任期付任用職員）	島村 範久
主 事（任期付任用職員）	大野 美知子



第 1 図 埼玉県の地形図

Ⅱ 遺跡の立地と環境

賢木岡東遺跡は、熊谷市に所在し、JR 高崎線熊谷駅の南西約 11 km、荒川から南へ約 6 km に位置する。熊谷市は西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地及び比企丘陵、北側、東側には妻沼低地が広がり、本市の大半はこの妻沼低地上に位置している。

本遺跡が位置する大里地域は平成 17 年に合併する以前は大里町であり、この地域は荒川上流右岸に位置し、地形的には低位の扇状地と比企丘陵を有している。

遺跡はこの比企丘陵先端の箕輪台地の北に開削された谷状傾斜地に位置する。標高 30 m 前後が最大であるこの箕輪台地は比企丘陵でも一段低い台地となっており、台地の形状は中央部が平坦で周囲にある水田に向かって緩やかに傾斜している。北側には水田と和田吉野川が流れ、南側は丘陵からの多数の開析谷が入り組んでいる。

この箕輪台地での遺跡の分布状況は、ほぼ全面において確認されている。今回は、この箕輪台地周辺における歴史環境を紹介させていただく。

箕輪台地での縄文時代は、前期が北廓遺跡、中廓遺跡などで黒浜式の土器を有する土坑が検出されている。中期では、遺物は見られるものの遺構等は確認されていない。後期から晩期にかけては台地東側の中廓遺跡で安行 1～3a の土器群が表採されている。

周辺の遺跡状況を見てみると前期の黒浜式、諸磯式土器の出土遺跡が、比企丘陵北東部では青山遺跡で諸磯 a 式の住居跡 1 軒が検出され、桜谷北遺跡では同時期の土坑を検出している。南比企地方では、緑山遺跡から黒浜、諸磯 a 式の住居跡 3 軒、土坑 6 基を検出し、桜山古墳群、立野遺跡等では諸磯 a 又は b 式土器を出土している。また、近年の発掘調査で北廓遺跡の前期の住居跡からは使用痕のある玉斧が検出している。

一方、荒川右岸の江南台地から扇状地扇頂のある寄居方面に目を向けてみると、代表的なもので深谷市の船山遺跡においてまとまった諸磯 a・b 式土器が出土しており、さらに寄居町の河岸段丘面には甘粕原遺跡、ゴシン遺跡が所在する。荒川左岸においてはいくつかの遺跡があるが、荒川右岸と左岸での縄文時代前期の遺跡の集中密度には違いが見られる。

弥生時代に入ると箕輪台地の北廓遺跡を中心に集落を営んでいたと思われ、他の地点ではこれまで遺構、遺物は確認されていない。北廓遺跡内に所在する市立吉見小学校の校庭には大型の方形周溝墓が数基検出され、住居跡と思われるプランも確認することができる。

比企丘陵では、弥生後期の土器である櫛状工具による文様主体とする岩鼻式土器と、縄文を主体とする吉ヶ谷式土器の二系統の土器群が存在する。先に述べた北廓遺跡の住居跡や方形周溝墓から両者の出土が確認されている。また、一部甕片からはどちらの土器の特徴を備えたものが確認されており、岩鼻式から吉ヶ谷式へと変化を示すものと考えられる。



古墳時代に入ると6世紀後半の築造と考えられる県選定重要遺跡の市内最大級の前方後円墳であるとかん山古墳、埼玉古墳群中の丸墓山古墳に次ぐ県内第2位の規模を有する円墳である甲山古墳が現存するが、周囲の遺物分布からかなりの埴輪片を拾うことができることから他にも古墳が存在したと思われる。今回の賢木岡東遺跡でも数点の埴輪片が採集できている。集落跡では中廊遺跡、番場遺跡、東松山市域の玉太岡遺跡、岡遺跡等に中期から後期の住居跡、土坑等が検出されている。

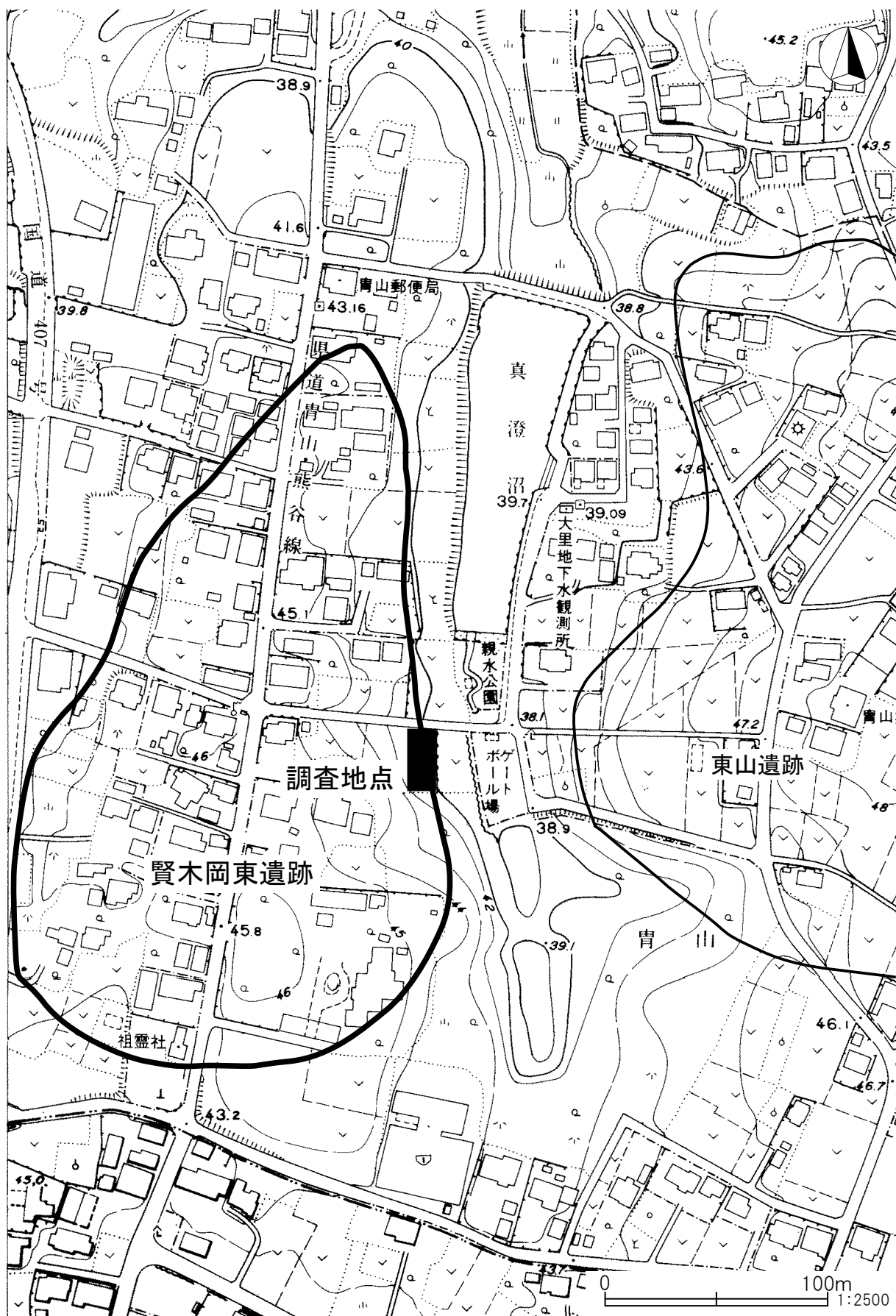
奈良・平安時代に入ると台地南側の比企丘陵寄りに賢木岡遺跡があり、地形に沿ってほぼ9世紀後半の集落跡がある。本報告の賢木岡東遺跡や中廊遺跡の一部では集落の一部が確認されるのみである。

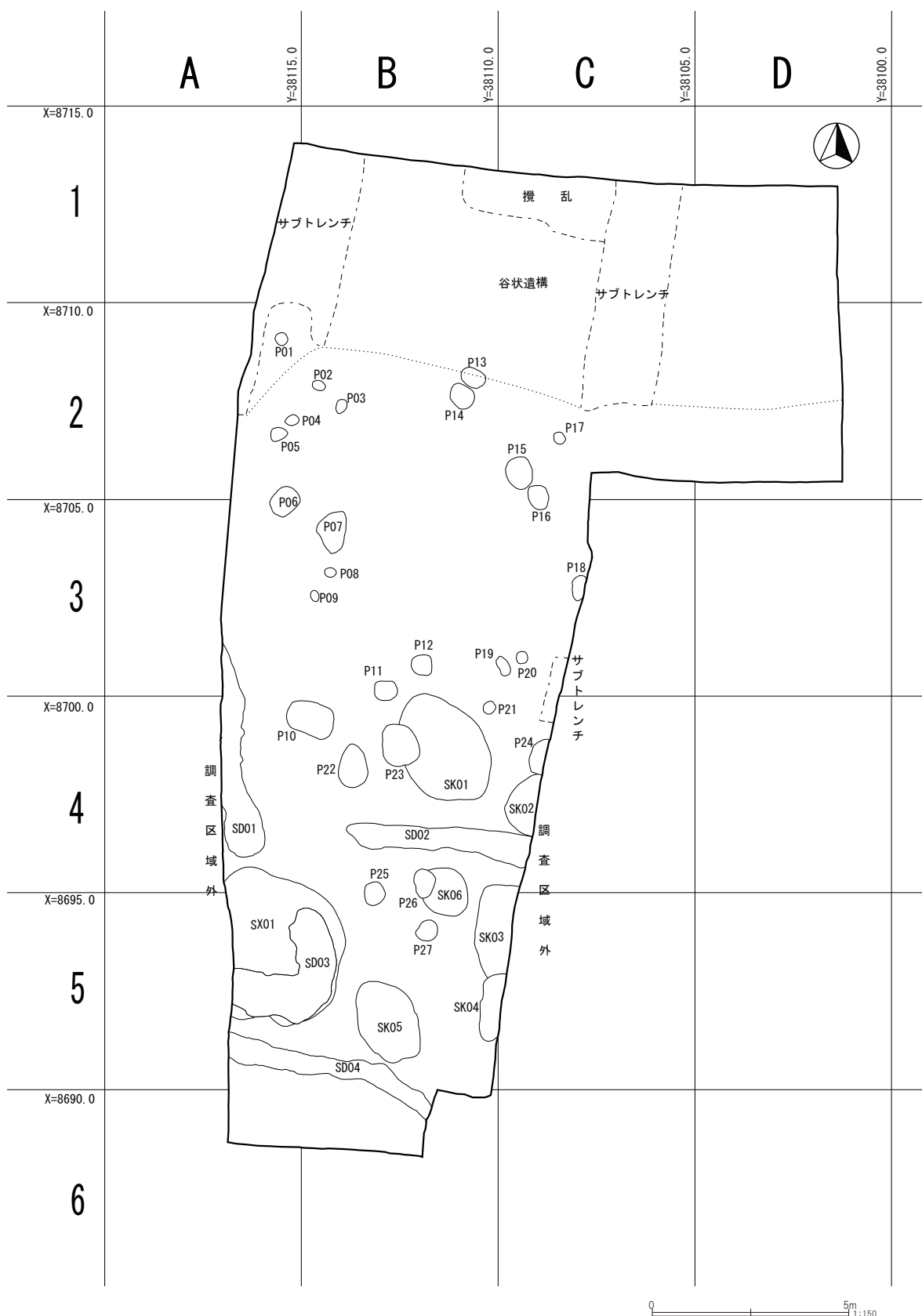
なお、近年の調査により北廊遺跡南端付近で8～9世紀前後の住居跡が確認できることから、中世に続く、集落が存在するのかもしれない。

中世に入ると地名から想定できるように館跡の所在であるが、過去の調査で水溜井戸及び柱穴群を検出し、同調査箇所南へ約100mの所に土塁が所在することなどから、市立吉見小学校を中心に館跡が所在したとみられる。しかし、時期や館主については不明な点も多い。このことについては、今後の調査によって明らかになっていくことであろう。

以上が比企丘陵に位置する箕輪台地の遺跡分布状況である。大まかにまとめると、縄文～弥生時代にかけては台地東側に偏るが、古墳時代に入ると集落が台地全体に広がり、奈良・平安になると丘陵寄りに偏る状況がみられる。中世では台地北側に館を構えるようになる。

なお、中世以降の歴史的事態はまだまだ情報不足で、今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところであろう。





第4図 調査箇所全測図

Ⅲ 遺跡の概要

1 賢木岡東遺跡について

賢木岡東遺跡は、これまでに発掘調査は実施されていないが、現地調査、採集などから縄文時代中期の集落跡や、古墳時代後期の古墳などが確認されている。本遺跡は中心に県道が南北に走り、その西側は台地上の平坦部にあたり、東側は谷状傾斜地となる。今回調査を実施した地点はその東側の傾斜地の一部である。

なお、本遺跡の周辺には丘陵を西へ進めると6世紀後半に築造されたと考えられる円墳の甲山古墳があり、東側の谷状傾斜地を挟んだ向かい側には縄文時代中期の集落や古墳時代後期の円墳などが確認された東山遺跡が包蔵する。

2 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として東へA・B・C・・・、南へ1・2・3・・・とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以西もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。なお、座標は周辺の過去の発掘調査地点との照会を容易にするため、世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。重機による表土剥ぎを実施し、その後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごと一括して慎重に取り上げた。遺構は写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

3 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、合計して、溝跡4条、土坑6基、ピット27基、谷状遺構1箇所、性格不明遺構1基であった。調査区は西から東に傾斜する谷状の地形であり、規模の大きな遺構は南側に集中して確認されている。北側は北に大きく落ち込む谷状遺構が確認されている。

遺物は遺構数の割に少なく、縄文土器が中心で、焙烙などの中世以降の遺物も何点か確認することができた。検出した遺物量はコンテナ（大きさ：縦40cm、横60cm、深さ14cm）に2箱であった。

IV 遺構と遺物

1 溝跡

本調査における溝跡の検出状況は全部で4条が確認された。第1号溝跡は南北軸、第2、4号溝跡は東西軸方向に延伸し、第3号溝跡は東西軸から南北軸へ屈曲する。

以下、溝跡ごとに詳細を記載する。

第1号溝跡（第5図）

A-3、4グリッドから検出した。他の遺構との重複関係にはないが、多くが調査区域外となっている。

本調査区の西壁に接し調査区域外から南北軸方向に延伸し、第1号性格不明遺構の北で終結する。

平面プランは非常に不整形で、底面は起伏が目立つ。

規模は、検出長 5.5 m 程度、検出幅 1.0 m ～ 0.72 m を測り、深さは浅く、10 cm を測る。

埋土は、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

用途は不明である。

出土遺物は微細な土器片のみで、時期を判別できるものは確認できなかった。

第2号溝跡（第5図）

B、C-4グリッドから検出した。北側の一部が第2号土坑と重複しており、第2号土坑を切っている。東側は調査区域外となるため全容は残念ながら不明であるが、調査区域外から東西軸方向に延伸し、第25号ピットの北で終結する。

規模は、規検出長 4.7 m 程度、検出幅 0.81 m ～ 0.58 m を測り、深さは断面観察から 25 cm 程度を測る。

断面形は逆さ台形であり、底部はやや平坦であった。断面観察から西に進むにつれ、掘り方が浅くなっている。

埋土は、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

用途は不明である。

出土遺物は石製品の管玉が1点確認された以外は、微細な土器片のみであった。

第3号溝跡（第6・7図）

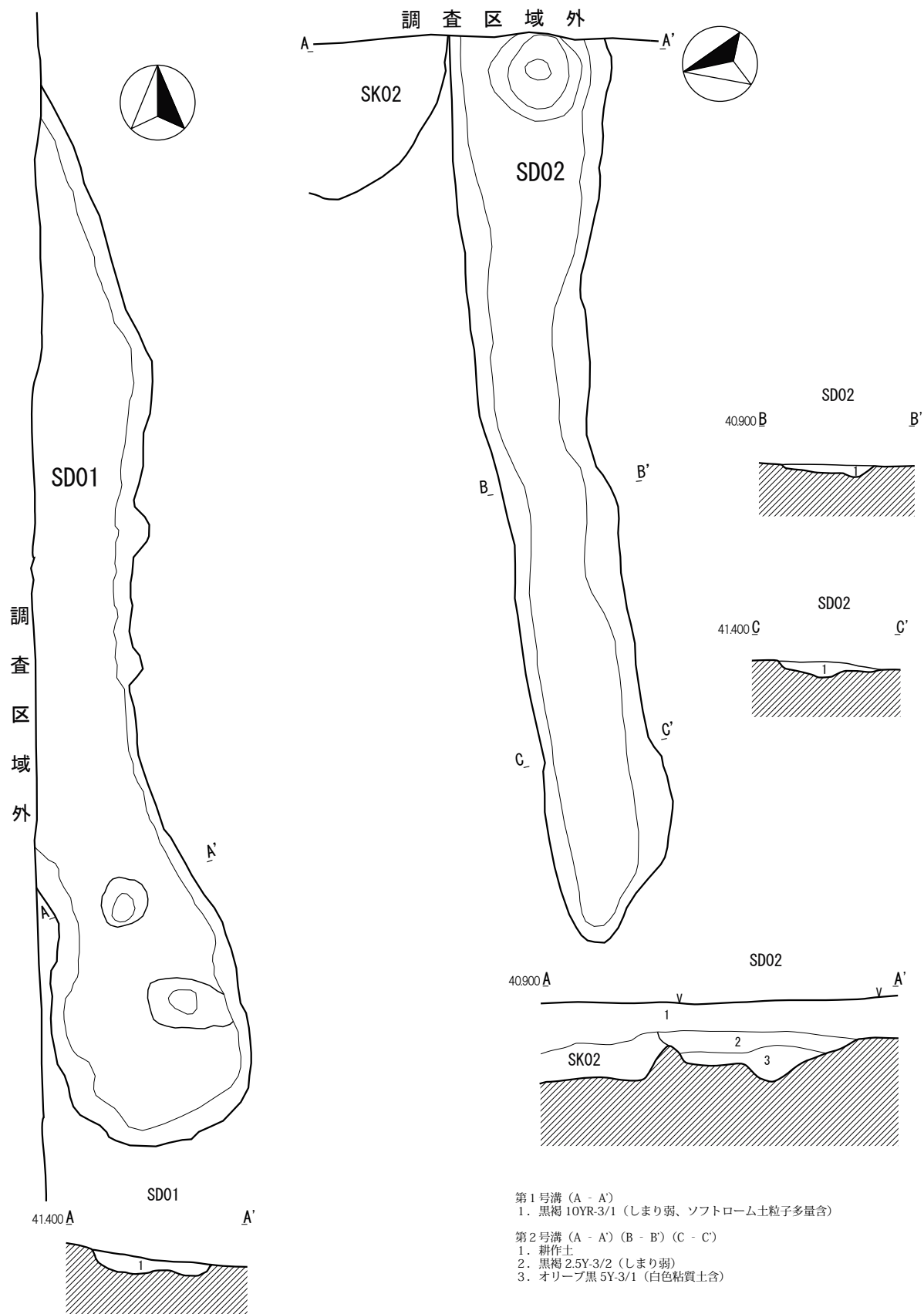
A、B-5グリッドから検出した。第1号性格不明遺構と重複しており、第1号性格不明遺構を掘り込む形で検出した。

一部は調査区域外となるため全容は残念ながら不明であるが、調査区域外から東西方向で東に延伸し、途中で南北方向に屈曲し、終結する。

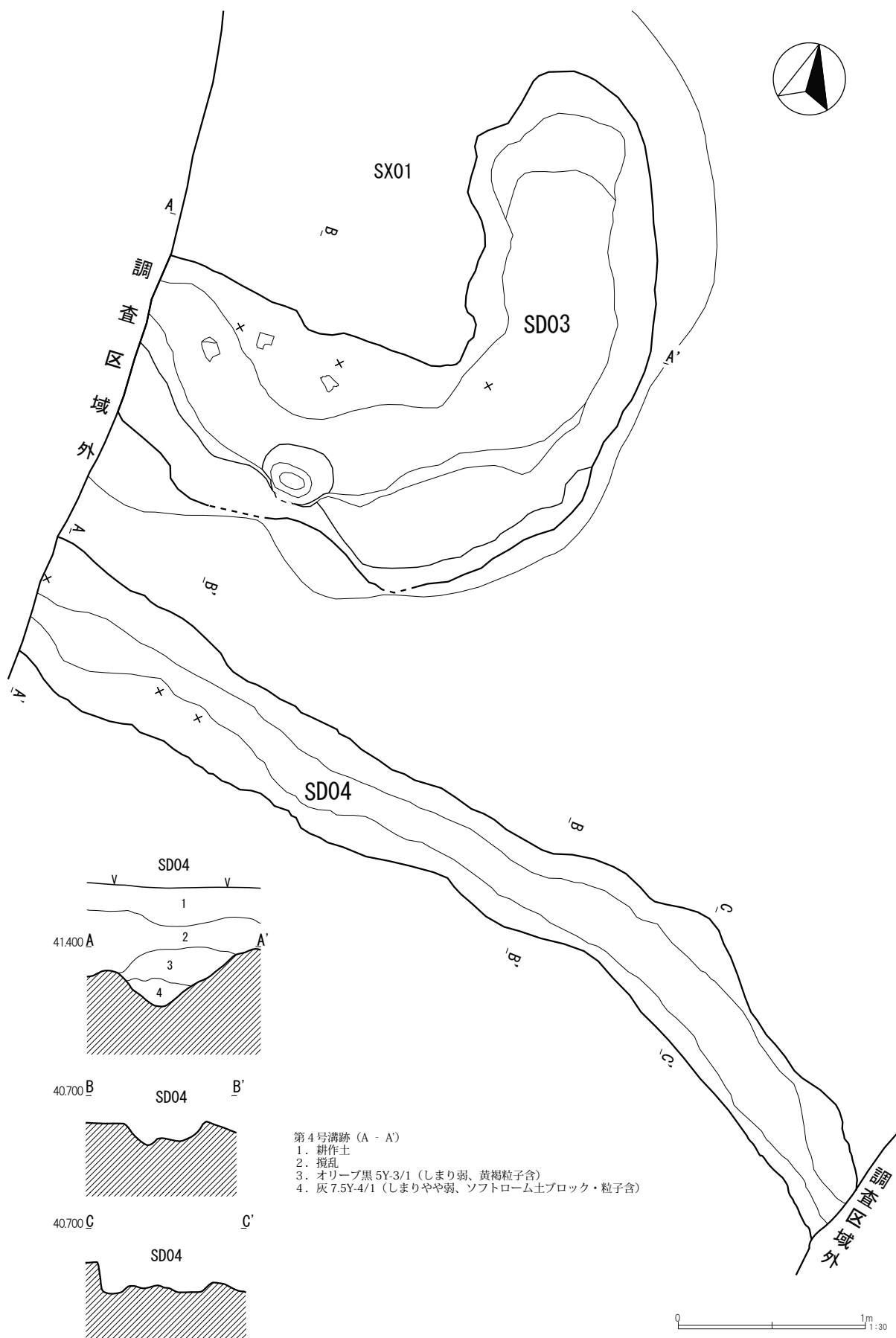
規模は東西方向で検出長 1.85 m、南北方向で全長 2.2 m、幅は 1.15 m ～ 0.92 m を測り、深さは断面観察から 45 cm を測る。

掘り込みは緩やかで、重複する第1号性格不明遺構の落ち込みの直上に位置することから第1号性格不明遺構が埋まった後に掘り直されたものと推定できる。

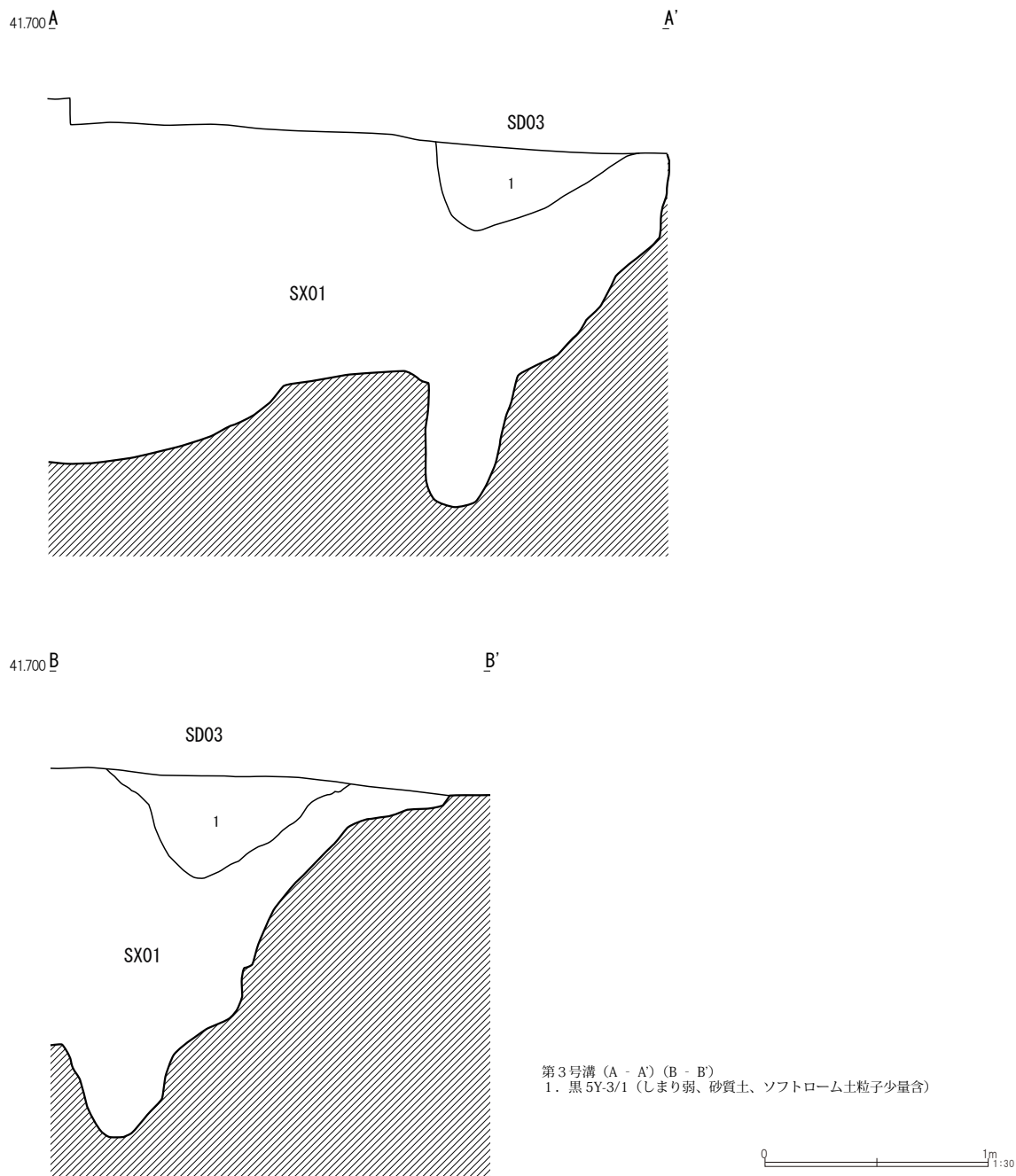
埋土は、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。



第5図 溝跡 (第1、2号溝跡)



第6図 溝跡 (第3、4号溝跡)



第7図 溝跡（第3号溝跡 土層断面）

用途は不明である。

出土遺物は円筒埴輪片が検出された。谷上部からの流れ込みと考えられる。

第4号溝跡（第6図）

A、B-5、B-6 グリッドから検出した。重複関係にある遺構はなかった。

一部は調査区域外となるため全容は不明であるが、調査区域外から東西方向で東に延伸し、再び調査区域外へ抜ける。

規模は検出長 5.5 m、幅は 0.71 m～0.35 mを測り、深さは断面観察から 30 cmを測る。

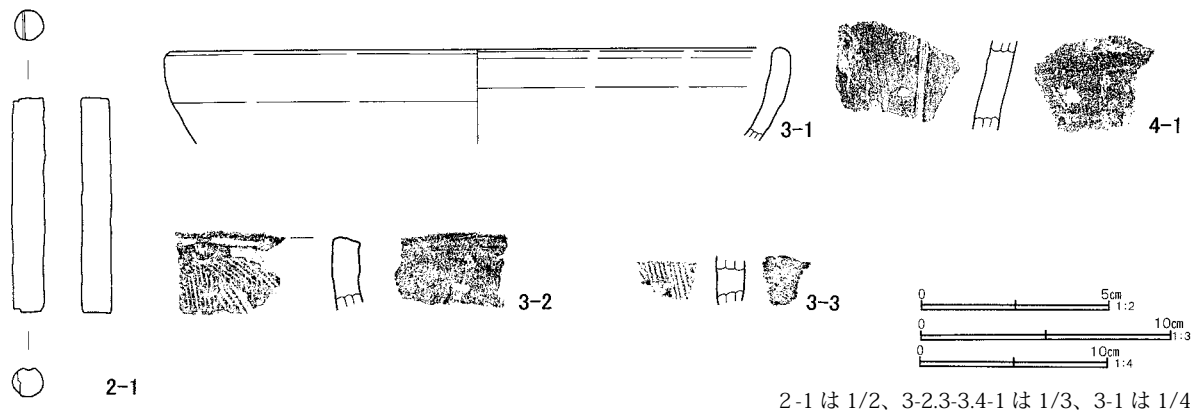
断面形は西側ではV字状で、東に延伸するにつれ不規則になり、底部も起伏が目立つようになる。

地形に沿って西から東に傾斜している。

埋土は、断面から自然堆積により埋まったものと推測でき、西壁では断面観察から北から埋まったものと推定できる。

用途は不明である。

出土遺物は縄文土器が数点検出したが、実測可能なものは1点のみであった。



第 8 図 溝跡出土遺物

第 1 表 溝跡出土遺物観察表

N o	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調		焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
2-1	SD02	石製品 管玉	最大長 5.7 最大幅 0.8 最大厚 0.8 重さ 5 g								外面：縦位すり痕 上下部切り取り痕有	泥岩
3-1	SD03	焙烙	(33.4)	(5.0)	-	ABDGIK	灰オリーブ 5Y-4/2		B	口縁部 10%	表（左上）に小穴仕掛け有	
3-2	SD03	円筒埴輪	-	-	-	BD	明赤褐 5YR-5/6		B	破片 口唇部	外面：縦ハケ目 内面：ヨコナデ	ハケ目 8 本 /cm
3-3	SD03	円筒埴輪	-	-	-	BDE	明赤褐 5YR-5/6		B	破片	外面：縦ハケ目 内面：ナデ	ハケ目 7 本 /cm
4-1	SD04	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-		B	破片	外面：縦位沈線有	

2 土坑

本調査における土坑の検出状況は全部で 6 基が確認された。いずれも調査区の南東グリッド周辺から検出した。

以下、各土坑ごとに詳細を記載する。

第 1 号土坑（第 9 図）

B－4 グリッドから検出した。第 23 号ピットと重複しており、第 23 号ピットに一部切られている。

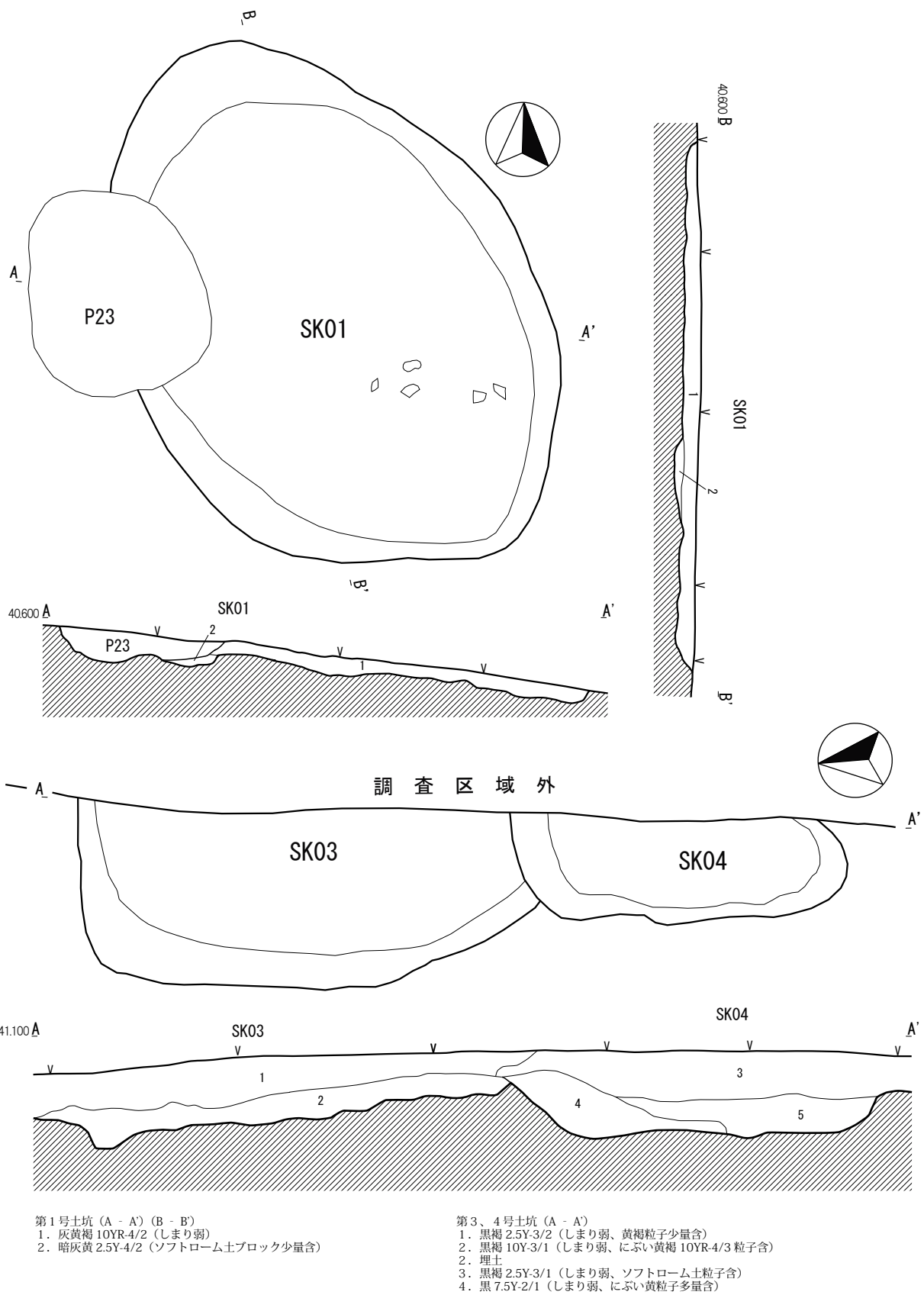
平面プランは、一部が不明であるが、楕円形または隅丸方形を呈するものだろう。

規模は長軸 3 m 程度、短軸 2.2 m、深さは 12 cm を測る。

断面形は緩やかな傾斜で、底面はわずかな起伏があるが、ほぼ平坦である。

底面は白色粘土層が確認されたことから、粘土採掘用の土取り遺構と考えられる。

出土遺物は縄文時代中期の土器片が複数出土している。



第9図 土坑 (第1、3、4号土坑)

0 1m 1:30

第2号土坑（第10図）

C-4グリッドから検出した。一部を第2号溝跡、第24号ピットに切られており、そのどちらにも切られている。また一部が東壁の調査区域外であるため全容は残念ながら不明である。

平面プランは検出された一部から、東西に長いいびつな方形を呈するものと推測できる。

規模は検出長軸 1.58 m 程度、短軸 0.8 m 程度を測り、深さは断面観察から 18 cm を測る。

断面形は逆さ台形の落ち込みであり、底面は平坦である。

埋土は、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

用途は不明である。

出土遺物は微細な土器片のみで、時期を判別できるものは確認できなかった。

第3号土坑（第9図）

B、C-5グリッドから検出した。第4号土坑と重複しており、第4号土坑に一部切られている。

また一部が東壁の調査区域外であるため全容は残念ながら不明である。

平面プランは、一部が不明であるが、いびつな方形を呈するものだろう。

規模は検出長であるが、長軸 2.37 m、短軸 0.89 m を測る、深さは断面観察から 20 cm を測る。

断面形は、深さが浅いため詳細は不明だが、緩やかな落ち込みであると判断でき、底面は南から北への傾斜が確認できる。

埋土は、断面から1層のみであったが、自然堆積により埋まったものと推測できる。

用途は不明である。

出土遺物は確認されなかった。

第4号土坑（第9図）

B、C-4, 5グリッドから検出した。第3号土坑と重複しており、第3号土坑に切られていた。また一部が東壁の調査区域外であるため全容は残念ながら不明である。

平面プランは、一部が不明であるが、いびつな楕円形を呈するものだろう。

規模は検出長で、長軸 1.7 m、短軸 0.55 m を測り、深さは断面観察から 43 cm を測る。

断面形は、緩やかな傾斜をもつV字状の落ち込みであり、底面は平坦である。

埋土は、断面観察から北側から埋没が始まり、合計3層の堆積があり、自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は使用痕の認められる石錘や縄文時代中期に属すると考えられる土器片が出土した。

第5号土坑（第10図）

B-5グリッドから検出した。他の遺構との重複関係はない。

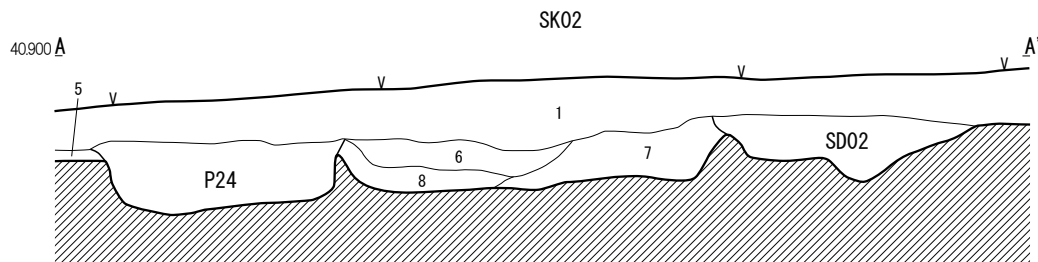
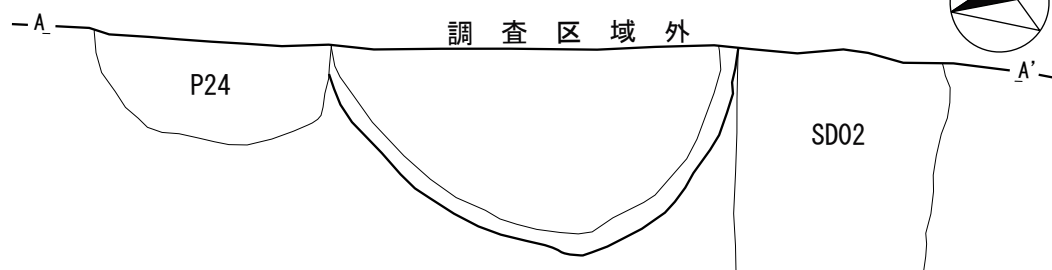
平面プランは、いびつな楕円形を呈するものである。

規模は長軸 2.21 m、短軸 1.45 m を測り、深さは最大で 20 cm を測る。

断面形は南北軸で、段を持つが、深さが浅いため詳細は不明である。

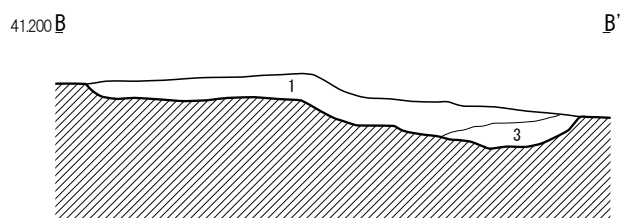
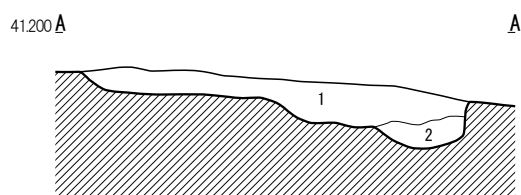
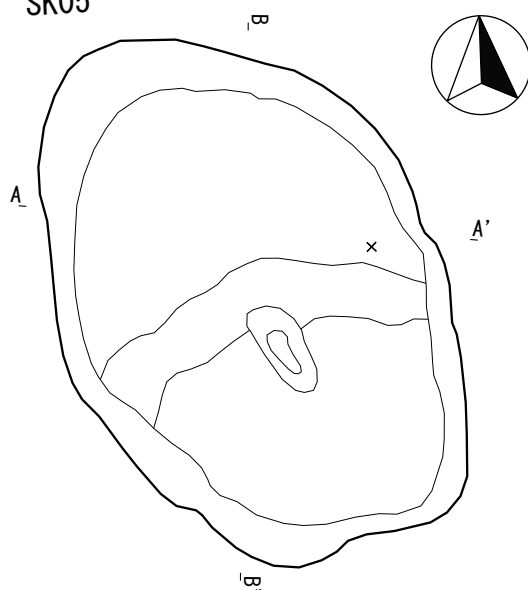
断面観察から南の落ち込みが深い部分から埋没したことが分かり、底部は白色粘土層が確認されたこ

SK02



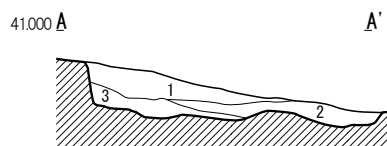
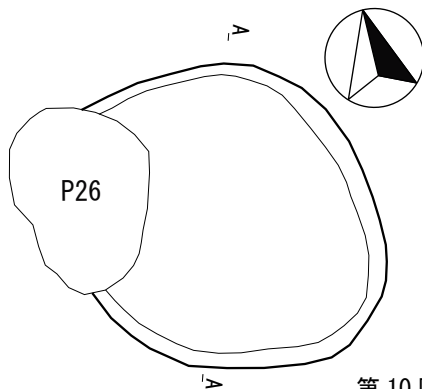
- 第2号土坑 (A - A')
1. 耕作土
 6. オリーブ黒 5Y-3/1
 7. オリーブ黒 7.5Y-3/1 (にぶい黄粒子多量含)
 8. オリーブ黒 10Y-3/1 (ソフトローム土粒子少量含)

SK05



- 第5号土坑 (A - A') (B - B')
1. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり弱、黄褐色粒子多量含)
 2. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまりやや強、黒褐色土粒子多量含)
 3. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり強、にぶい黄褐色土粒子含)

SK06



- 第6号土坑 (A - A')
1. 灰黄褐 10YR-4/2 (黄褐色粒子少量含)
 2. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり弱、黄褐色粒子多量含)
 3. 黒褐 10YR-3/1 (しまりやや強、にぶい黄褐色粒子含)

第10図 土坑 (第2、5、6号土坑)

とから、粘土採掘用の土取り遺構と考えられる。

埋土は、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は検出されなかった。

第 6 号土坑（第 10 図）

B－4、5 グリッドから検出した。第 26 号ピットと重複しており、第 26 号ピットに切られていた。

平面プランは、円形を呈するものである。

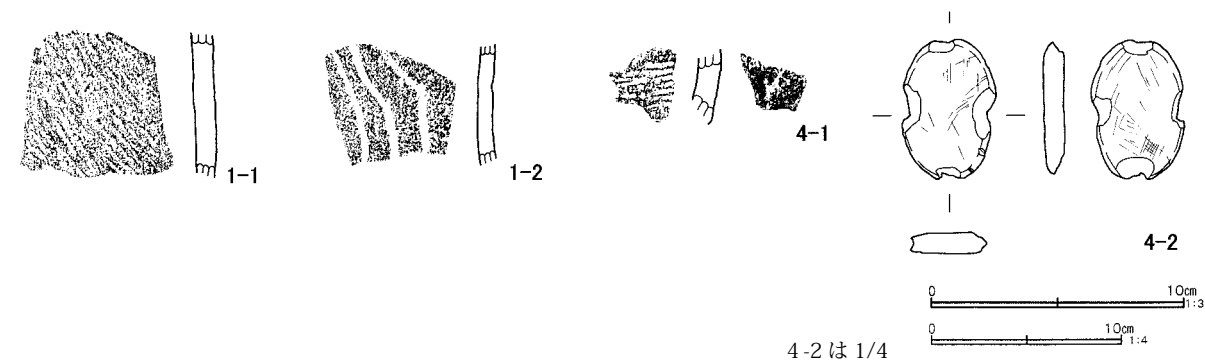
規模は長軸、短軸ともに 1.2 m を測り、深さは最大で 18 cm を測る。

断面形は逆さ台形と推定できるが、深さが浅いため詳細は不明である。

また、底面は白色粘土層が確認されたことから、粘土採掘用の土取り遺構と考えられる。

埋土は、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は検出されなかった。



第 11 図 土坑出土遺物

第 2 表 土坑出土遺物観察表

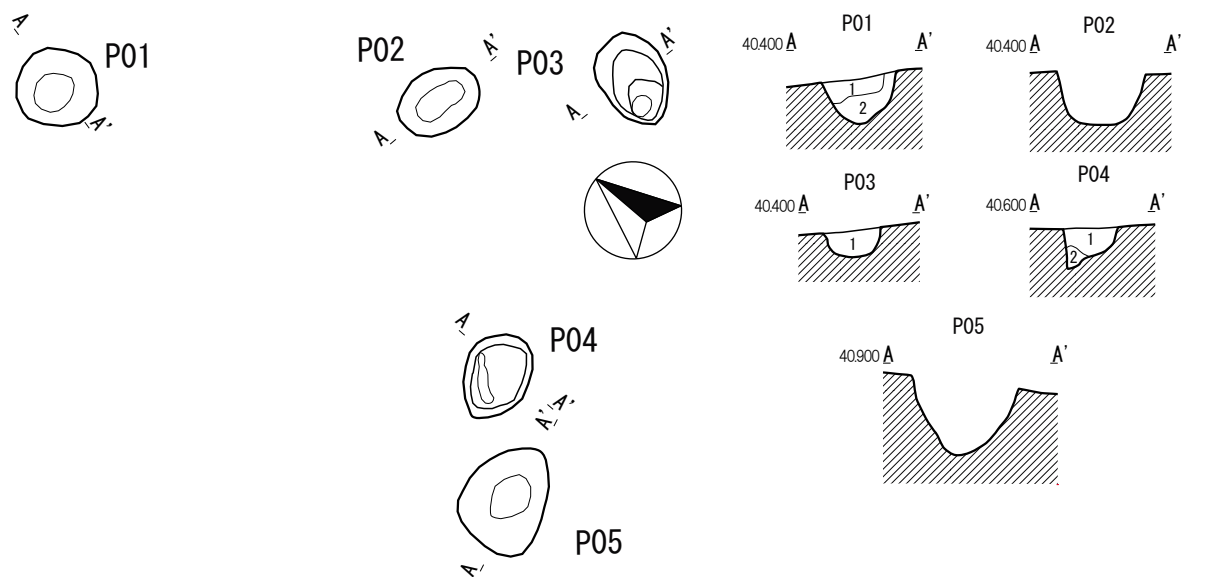
出土遺構	N o	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
SK01	1	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：縄文痕（摩耗著しい）	
SK01	2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：縄文痕（沈線 3 条有）	
SK04	1	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	破片	外面：縄文痕（LR 単節か？）	
SK04	2	石器 石錘	最大長 7.3	最大幅 5.0	最大厚 1.1	重さ 62 g					砂岩

3 ピット

ピットは、総じて 27 基検出し、調査区全体に点在する。柱穴などになるものはなく、いずれのピットも用途は不明である。以下、紙面の都合上、一覧表にて特徴を掲載する。

第 3 表 ピット一覧表

No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
1	A－2	円形	0.33 × 0.33 × 0.18		第 1 号谷状遺構	
2	B－2	楕円形	0.34 × 0.25 × 0.20		第 1 号谷状遺構	
3	B－2	楕円形	0.36 × 0.26 × 0.10		第 1 号谷状遺構	
4	A－2	隅丸方形	0.31 × 0.26 × 0.17			
5	A－2	楕円形	0.44 × 0.34 × 0.30			
6	A－2、3	隅丸方形	0.72 × 0.58 × 0.12			
7	B－3	楕円形	1.08 × 0.68 × 0.14			



第1号ピット (A - A')
 1. 黒 2.5Y-2/1 (しまり弱、ソフトローム土ブロック・粒子含)
 2. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり弱、ソフトローム土粒子含)

第3号ピット
 1. 黒褐 2.5Y-3/1 (しまり弱、ソフトローム土粒子含)

第4号ピット (A - A')
 1. 黒褐 2.5Y-3/1 (しまり弱、ソフトローム土粒子ごく少量含)
 2. 暗灰黄 2.5Y-5/2 (しまり弱)

第6号ピット (A - A')
 1. 黒褐 10YR-3/1 (しまり弱、ソフトローム土粒子含)

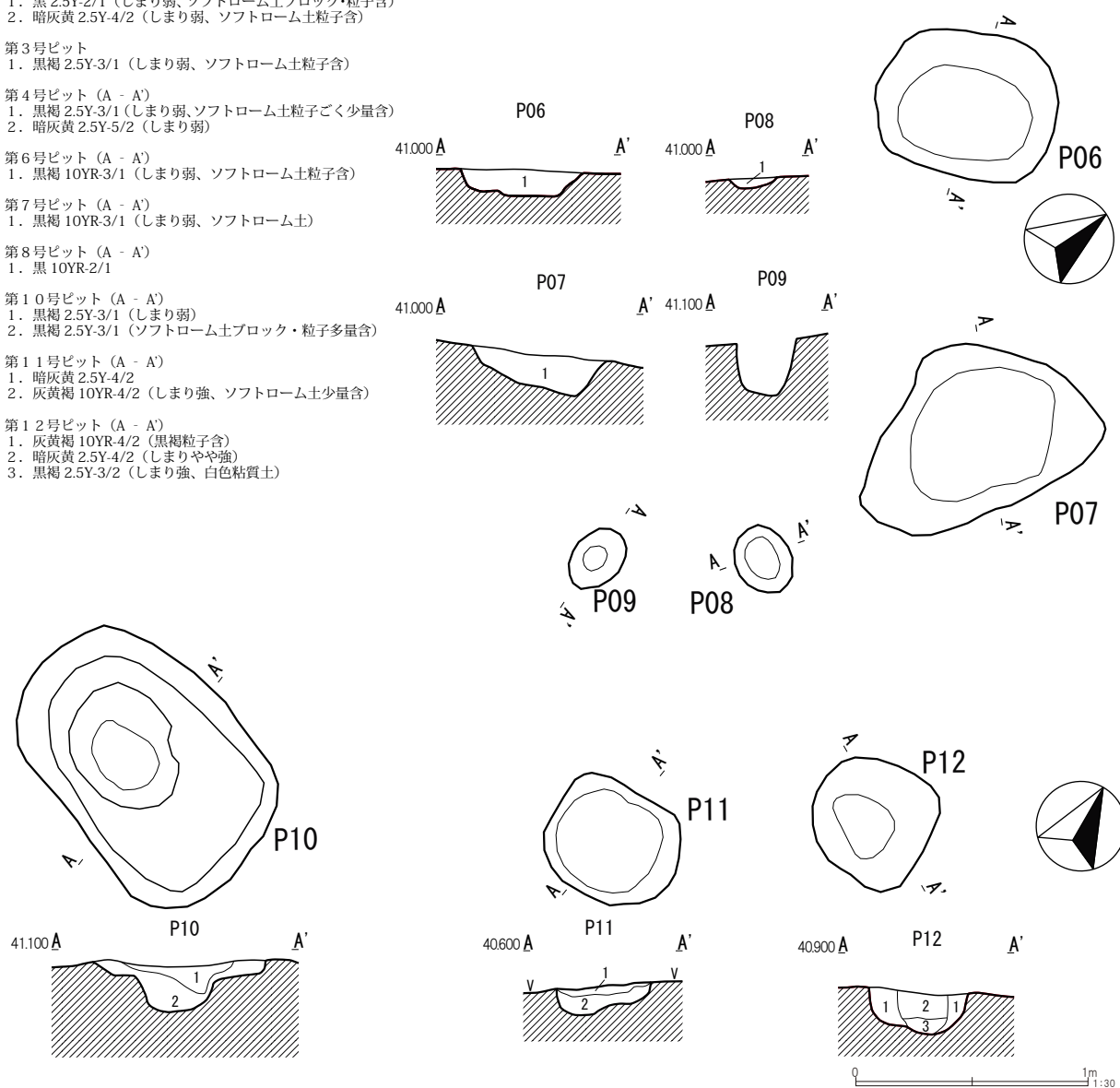
第7号ピット (A - A')
 1. 黒褐 10YR-3/1 (しまり弱、ソフトローム土)

第8号ピット (A - A')
 1. 黒 10YR-2/1

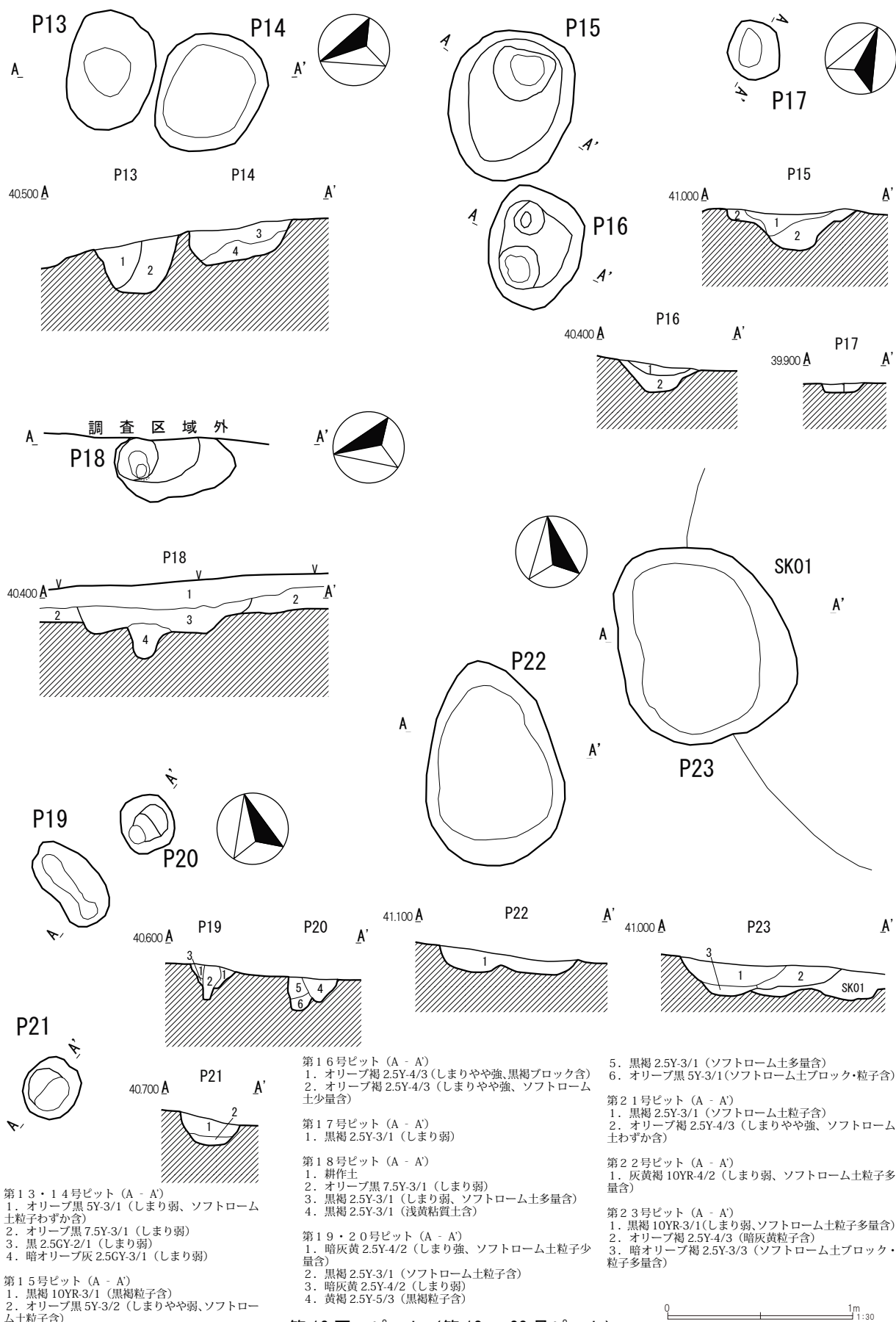
第10号ピット (A - A')
 1. 黒褐 2.5Y-3/1 (しまり弱)
 2. 黒褐 2.5Y-3/1 (ソフトローム土ブロック・粒子多量含)

第11号ピット (A - A')
 1. 暗灰黄 2.5Y-4/2
 2. 灰黄褐 10YR-4/2 (しまり強、ソフトローム土少量含)

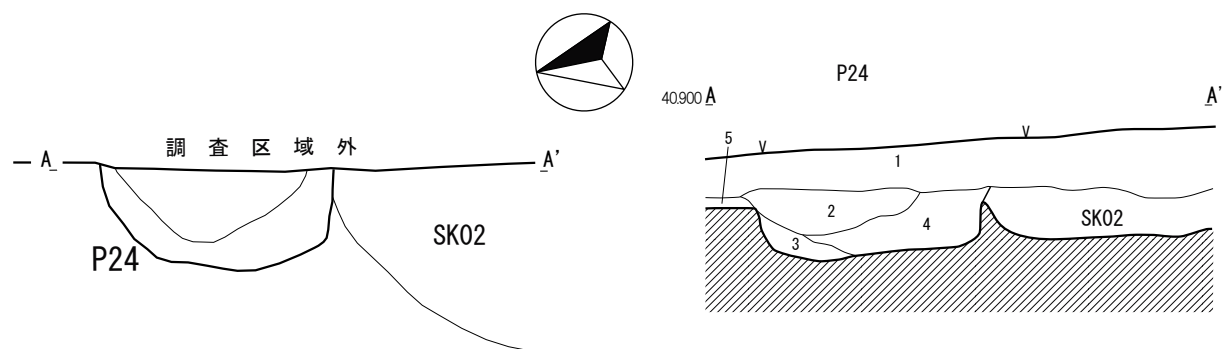
第12号ピット (A - A')
 1. 灰黄褐 10YR-4/2 (黒褐粒子含)
 2. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまりやや強)
 3. 黒褐 2.5Y-3/2 (しまり強、白色粘質土)



第12図 ピット (1～12号ピット)



第13図 ピット (第13～23号ピット)

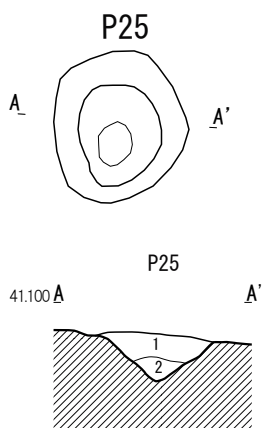


第24号ピット (A - A')

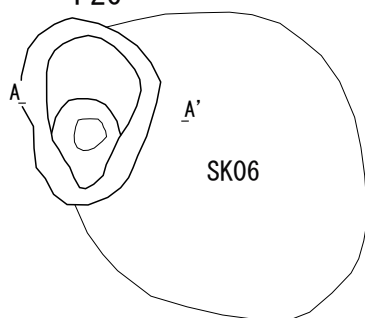
1. 耕作土
2. 黒褐 2.5Y-3/1 (しまり弱、ソフトローム土粒子少量含)
3. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり弱、ソフトローム土微粒子含)
4. オリーブ黒 5Y-3/1 (ソフトローム土ブロック含)
5. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり弱)

第25号ピット (A - A')

1. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり少々強)
2. 黒褐 2.5Y-3/2 (しまり強)



P26



41.100 A

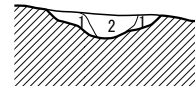
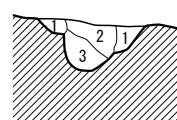
P26

A'

41.100 A

P27

A'



第26号ピット (A - A')

1. 暗灰黄 2.5Y-4/2
2. 黒褐 2.5Y-3/1
3. 灰オリーブ 5Y-4/2 (黒褐粒子多量混)

第27号ピット (A - A')

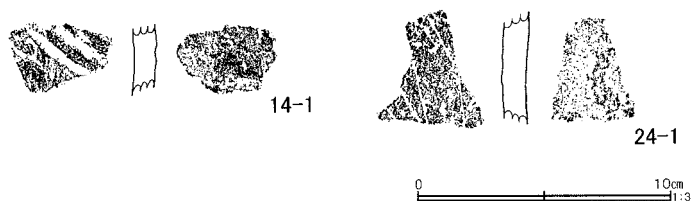
1. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり弱)
2. 黒褐 2.5Y-3/1 (ソフトローム土少量含)



第14図 ピット (第24～27号ピット)

第3表 ピット一覧表

No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係 (新旧)	備考
8	B-3	楕円形	0.33 × 0.22 × 0.08			
9	B-3	円形	0.28 × 0.21 × 0.22			
10	A, B-4	隅丸方形	1.18 × 0.80 × 0.20			
11	B-3, 4	隅丸方形	0.58 × 0.48 × 0.12			
12	B-3	楕円形	0.49 × 0.48 × 0.18			
13	B-2	楕円形	0.64 × 0.45 × 0.27		第1号谷状遺構	
14	B-2	隅丸方形	0.67 × 0.52 × 0.17	縄文土器	第1号谷状遺構	
15	C-2	楕円形	0.80 × 0.65 × 0.18			
16	C-2, 3	楕円形	0.60 × 0.50 × 0.15			
17	C-2	円形	0.30 × 0.30 × 0.08			
18	C-3	(楕円形)	0.64 × (0.32) × 0.27			
19	B, C-3	楕円形	0.50 × 0.25 × 0.18			
20	B-3	円形	0.30 × 0.28 × 0.18			
21	B-4	円形	0.32 × 0.28 × 0.15			
22	B-4	楕円形	1.08 × 0.67 × 0.12			
23	B-4	円形	1.06 × 0.88 × 0.18		第1号土坑	
24	C-4	(楕円形)	0.89 × 0.38 × 0.25	縄文土器		
25	B-4, 5	円形	0.58 × 0.51 × 0.18			
26	B-4, 5	楕円形	0.71 × 0.50 × 0.18		第6号土坑	
27	B-5	楕円形	0.53 × 0.51 × 0.08			



第 15 図 ピット出土遺物

第 4 表 ピット出土遺物観察表

出土遺構	No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
P14	1	縄文土器	-	-	-	BDHN	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	破片	外面：ヘラ描沈線による斜縄文	
P24	1	縄文土器	-	-	-	AD	外面：灰黄褐 10YR-4/2 内面：にぶい橙 7.5YR-6/4	B	破片	外面：くし描による沈線 3 条有	

4 谷状遺構

第 1 号谷状遺構（第 16 図）

A～D－1、2 グリッドから検出した。第 13、14 号ピットと重複関係にあり、いずれのピットにも切られていると推測できる。

本遺構は全面調査ではなく、2 か所にサブトレンチを設けた確認であることから、平面プランの設定はこのサブトレンチにより推測しており、調査区の北壁に向かって傾斜する大きな谷状の落ち込みである。

検出規模は全長 15.4 m、幅 14 ～ 11.5 m を測り、深さは現地表面下から 2.2 m を測る。

断面形は、緩やかな U 字状であり、緩やかな傾斜が確認できた。

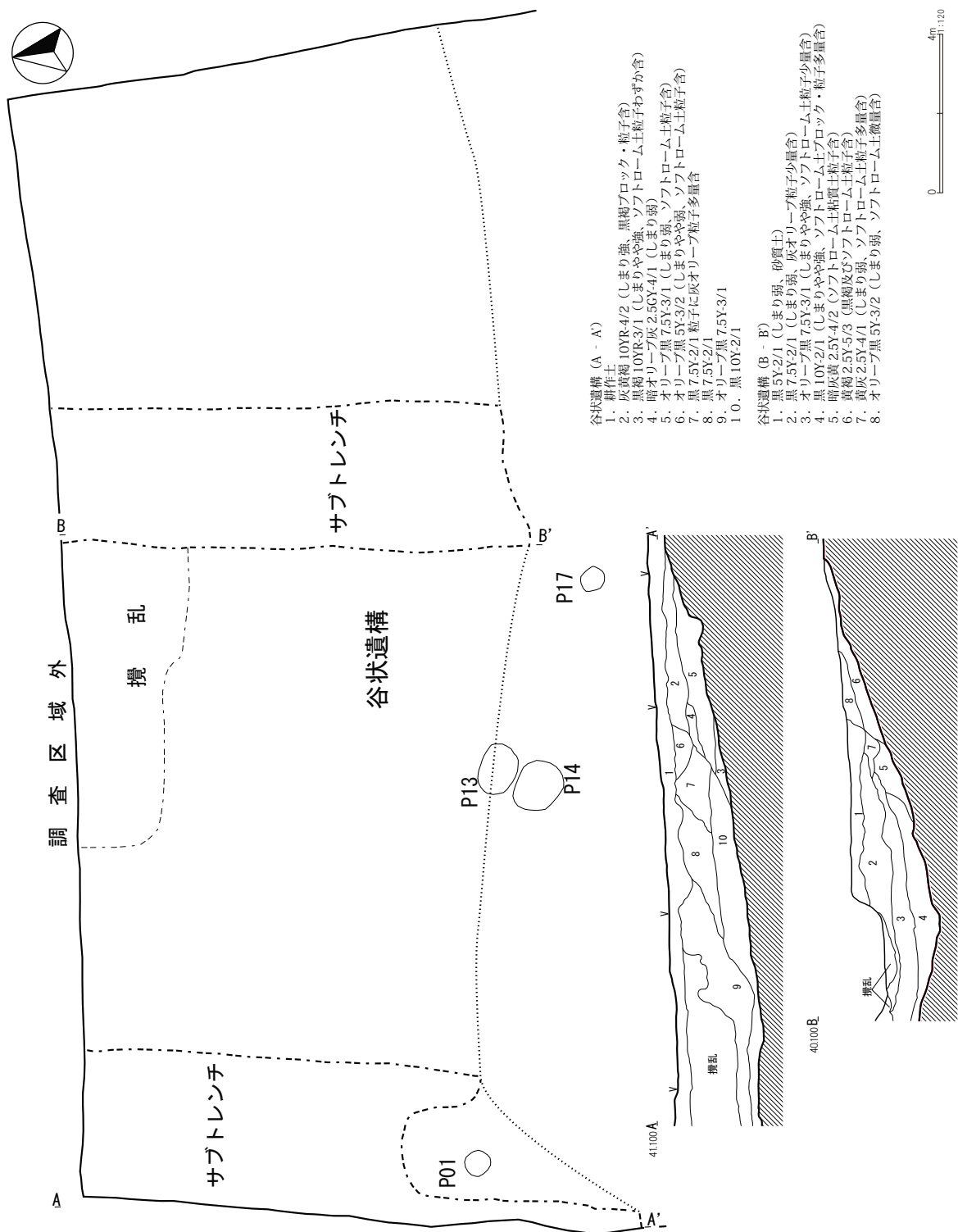
その覆土は樹木の腐敗によって形成された黒褐色土が多く確認でき、堆積は基本層は 4 層確認でき、いずれも地形にそった形で、南からの堆積が確認できることから、レンズ状堆積と考えられる。

遺構の北側は調査区域外であるが、断面（B－B'）からは調査区域外に向かって立ち上がりが確認することができる。そのため推測であるが、地形に沿った溝跡である可能性も考えられる。

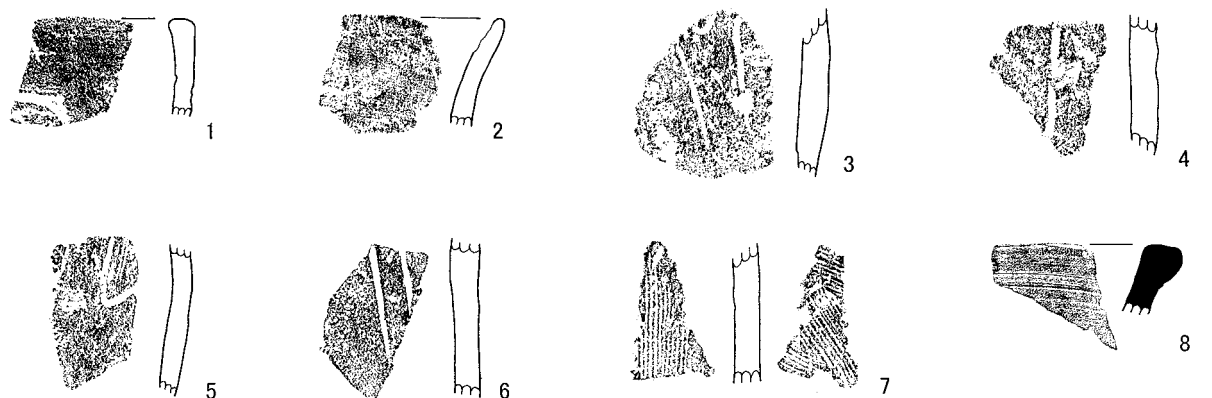
また、もう一つの考えとして、尾根のような自然地形としての考えも想定できる。現況道路は、その尾根に沿って造成されたものなのかもしれない。しかしながら、今回の調査ではこれ以上のことは判断できないため、不明である。

出土遺物は、本遺構の掘削がトレンチによるものであることから、全面調査ではないが、縄文土器が大半である。

時期判断できるものは確認できなかったが、周辺の事例から考えて、縄文時代中期後半と考えられる。



第 16 図 谷状遺構



第 17 図 谷状遺構出土遺物

第 5 表 谷状遺構出土遺物観察表

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：ヨコナデ 下部にヘラ描沈線による弧状文有	
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：一部にミガキ痕有	
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	全体的にまもう著しい ヘラ描による沈線有（直線 2 条弧線 1 条）	
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	全体的にまもう著しい 外面：ヘラ描による沈線有	
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：ヘラ描による沈線有（連弧文の一部か？）	
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：ヘラ描による平行沈線文	
7	円筒埴輪	-	-	-	ABDH	橙 7.5YR-6/6	B	破片	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目（一部斜位）	ハケ目 7 本 / cm
8	須恵器 甕	-	-	-	A	黒 5Y-2/1	B	口縁部破片	口唇部：ミガキ顕著 外面：ヨコナデ	

5 性格不明遺構

第 1 号性格不明遺構（第 18 図）

A、B－4、5 グリッドから検出した。第 3 号溝跡と接しており、第 3 号溝跡に切れていた。なお、この遺構の一部は調査区域外である。

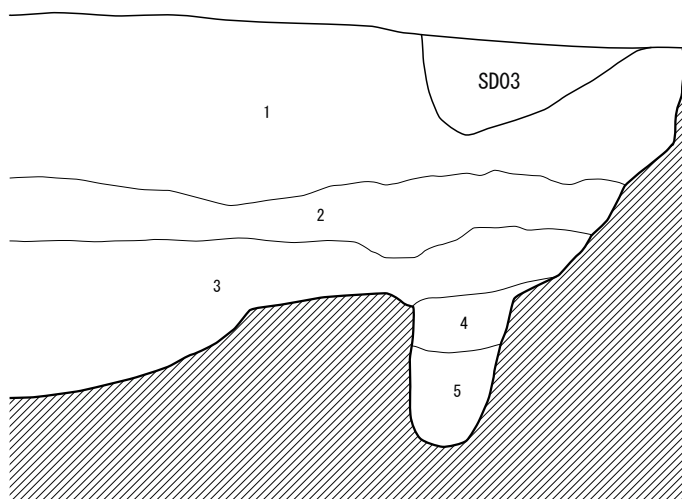
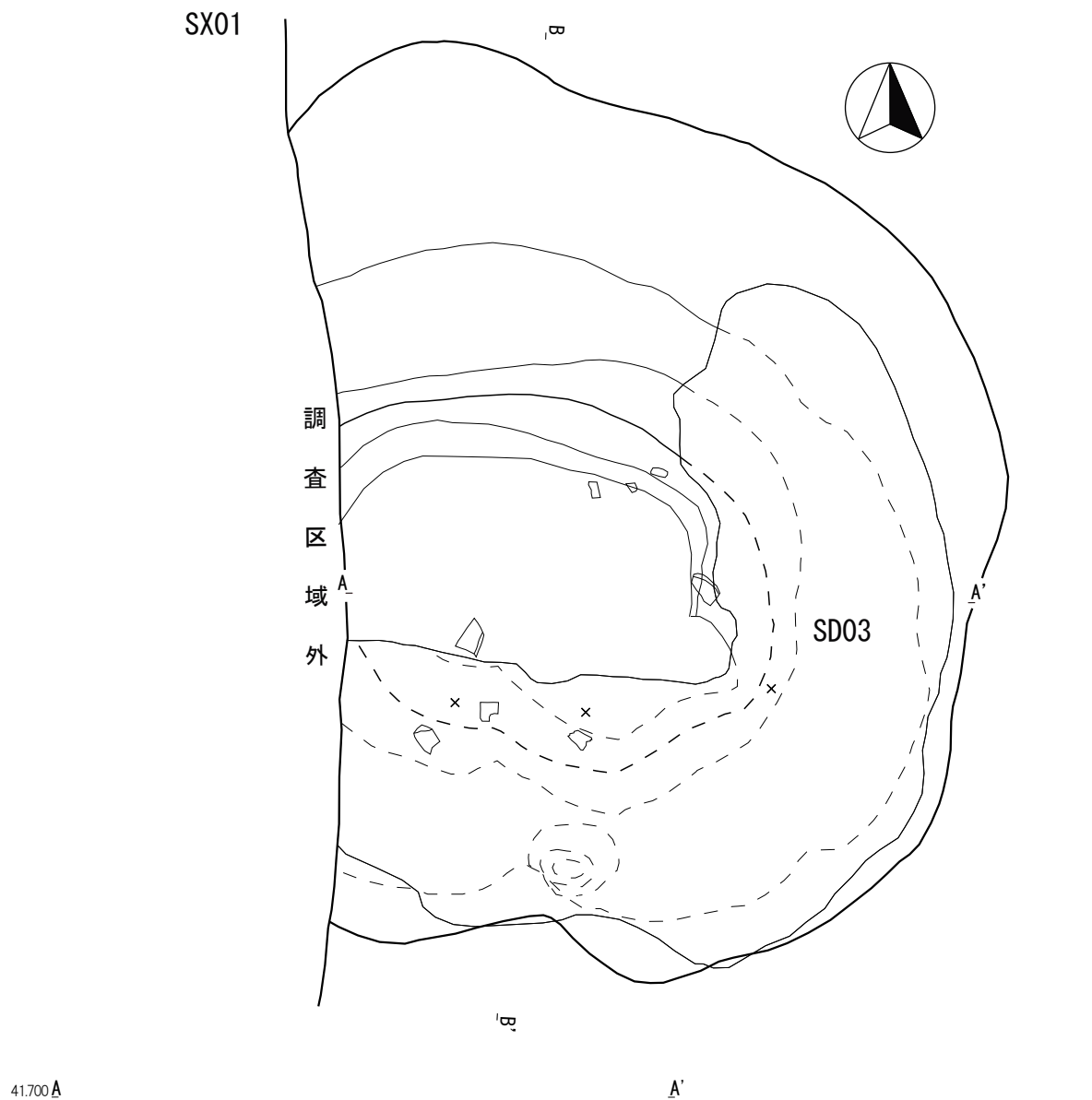
平面プランは、やや不整形の円形状遺構で、正確な様相は不明であるが、検出長軸約 3.54 m、検出短軸 2.62 m、深さは遺構確認面から 1.1 m を測る。

底面には、遺構の外周をめぐるように幅 0.6 m の溝状の落ち込みが確認でき、その落ち込みは遺構底面から深さ 58cm である。

また、その溝状の落ち込みに囲まれるように内側には円形の落ち込みが検出長軸 1.42 m、短軸 1.32 m で検出されている。深さは比較的浅く、32 cm 程度であった。

埋土は、土層観察から 3 層の堆積がみられ、地形的に傾斜地であることから比較的短時間で埋まったものと推定できる。

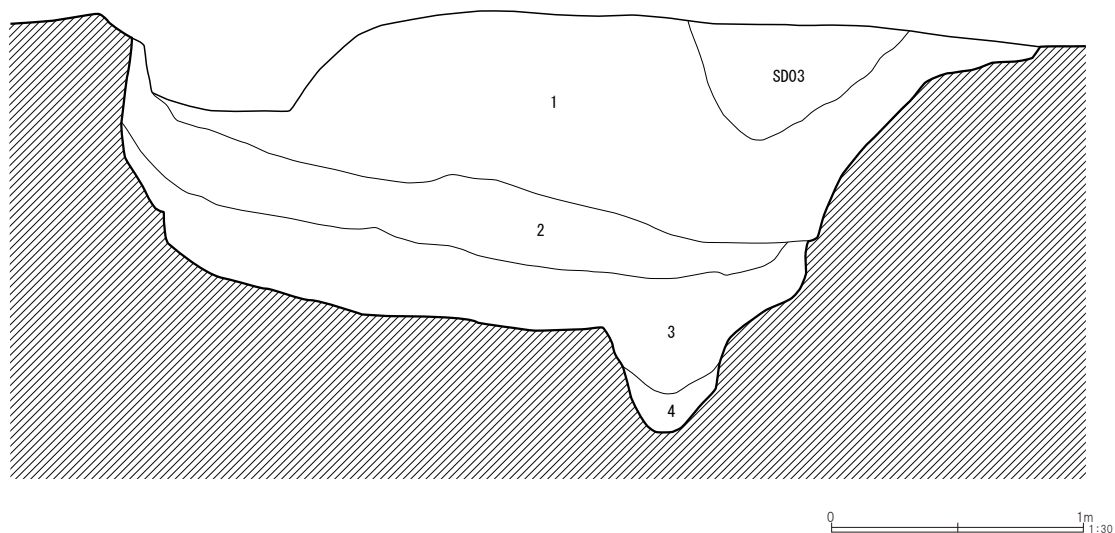
遺物は、縄文土器、円筒埴輪、焙烙などがみられ、その多くに時期差があることから、時期判断が難しく、遺構の性格は不明である。ただし、古墳時代後期以降の遺物が大半のため、その時期以降の遺構と考えられる。



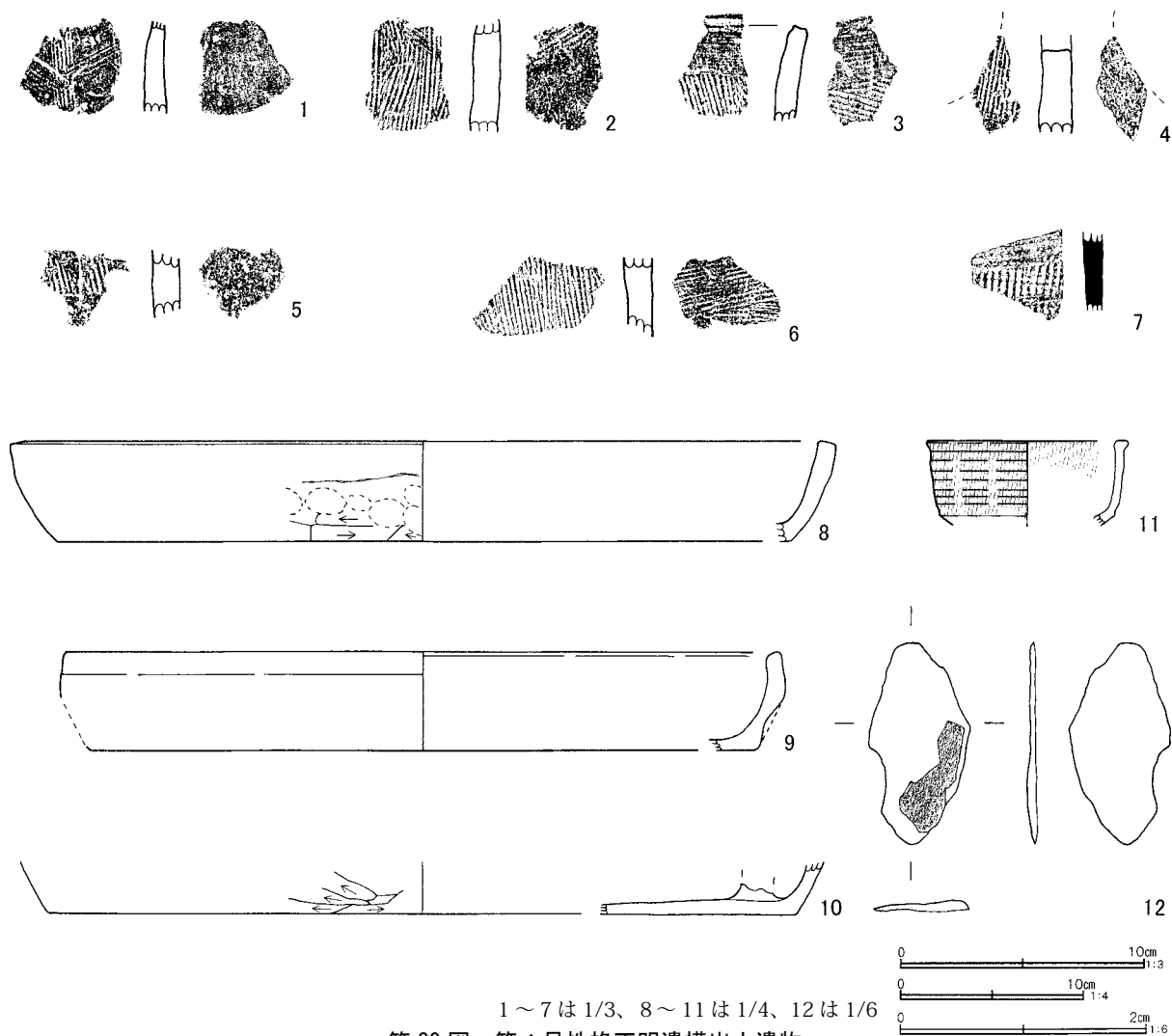
- 第1号性格不明遺構 (A - A') (B - B')
1. 黒7.5Y-2/1 (しまりやや有、ソフトローム土含)
 2. 暗灰黄 2.5Y-4/2
 3. 黒褐 10YR-3/1 (しまり弱、やや砂質土)
 4. 黒褐 10YR-3/2 (しまり弱、ソフトローム土多量含)
 5. 黒5Y-2/1 (しまりやや強、ソフトローム土粒子含)

0 1m 1:30

第18図 第1号性格不明遺構



第19図 第1号性格不明遺構 土層断面



第20図 第1号性格不明遺構出土遺物

第6表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表

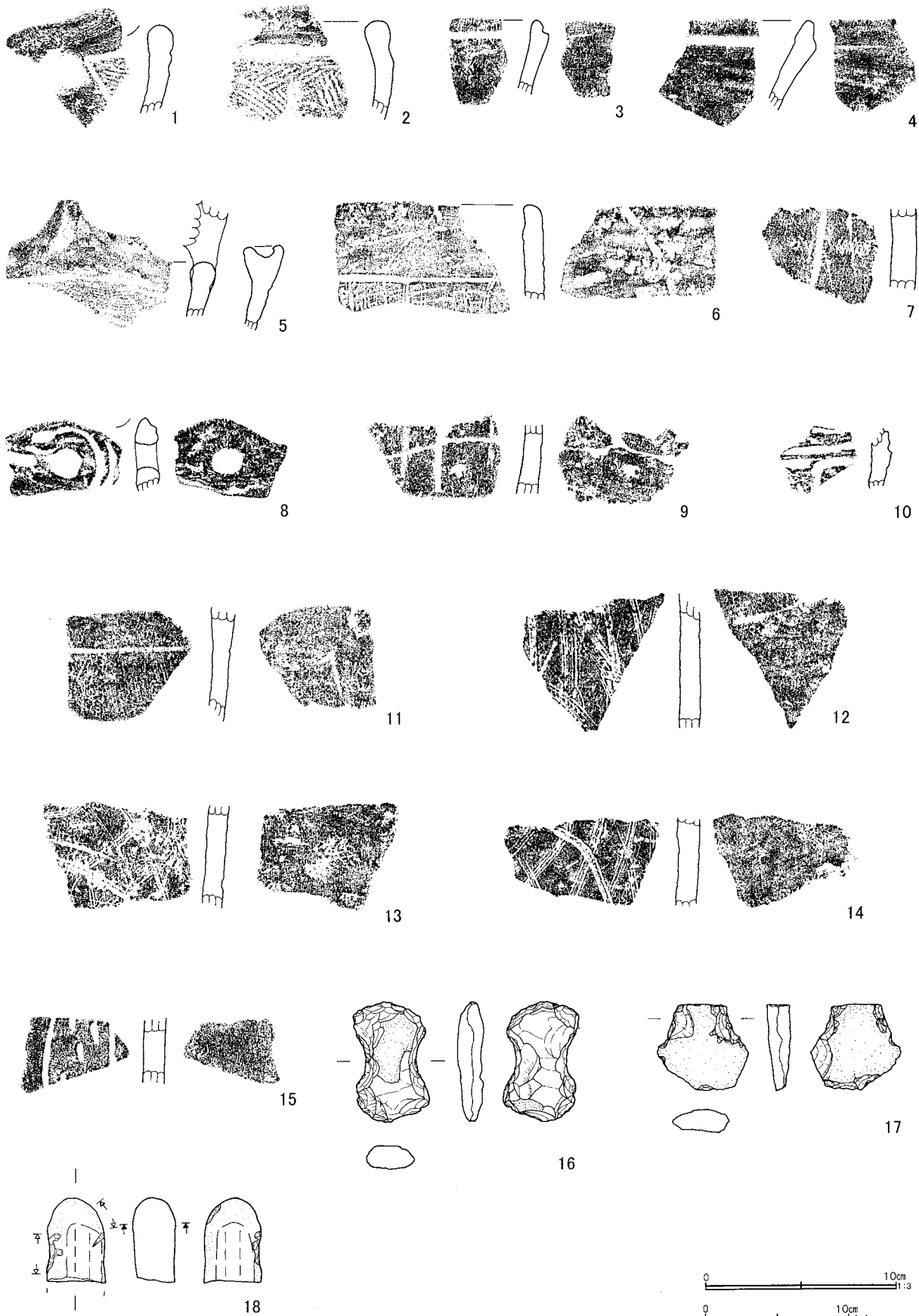
No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考	
1	縄文土器	-	-	-	-	-	B	破片	外面：くし描工具による交差状の羽状文（6本1単位）		
2	円筒埴輪	-	-	-	AEGIKN	明赤褐 5YR-5/6	B	破片	外面：縦位ハケ目（一部斜位） 内面：指ナデ及び斜位ハケ目	ハケ目 8本/cm	
3	円筒埴輪	-	-	-	AGN	明赤褐 5YR-5/6	B	口唇部破片	外面：口縁部ヨコナデ 胴部縦位ハケ目 内面：横及び斜位ハケ目	ハケ目 7本/cm	
4	円筒埴輪	-	-	-	AEHIN	明赤褐 5YR-5/6	B	スカシ部分破片	外面：縦位ハケ目	ハケ目 7本/cm	
5	円筒埴輪	-	-	-	AEHJN	明赤褐 5YR-5/6	B	破片	外面：縦位ハケ目	ハケ目 8本/cm	
6	円筒埴輪	-	-	-	AGN	明赤褐 5YR-5/6	B	破片	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目	ハケ目 7本/cm	
7	須恵器 甕	-	-	-	ADH	灰 7.5Y-4/1	B	破片	外面：格子状叩き目痕有		
8	焙烙	(45.2)	5.6	(40.0)	ABDHKM	オリーブ黒 5Y-3/1	B	口縁～胴部 10%	瓦質 外面：指頭圧痕有		
9	焙烙	(39.2)	5.4	(36.4)	ABDM	灰 5Y-4/1	B	口縁～胴部 15%	外面：煤付着		
10	焙烙	-	(2.9)	(41.0)	ABDEGHK	灰黄 2.5Y-6/2	B	胴～底部 10%	瓦質 欠損しているが内耳有 内外煤付着		
11	陶器 筒形香炉	(11.0)	(4.7)	-	A	灰白 2.5Y-8/2	B	口縁～胴部 25%	鉄釉つけかけ 瀬戸・美濃系か？		
12	板石塔婆	最大長	16.6	最大幅	8.9	最大厚	0.8	重さ	121 g		緑泥石片岩

6 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物については、主に表土剥ぎの遺物である。それらの多くは調査区北の谷状遺構付近からの検出である。

第7表 遺構外出土遺物観察表

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考	
1	縄文土器 深鉢か？	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：突帯部ハクリ 波状口縁深鉢 摩耗著しい ヘラ描による三角文の中に縄文を施す		
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	C	口縁部破片	外面：LR 単節による縄文痕（摩耗著しい） 数回に分けてころがしている		
3	縄文土器	-	(3.9)	-	-	-	B	口縁部破片	外面：口縁部有段		
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：横ナデ調整痕		
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	波状口縁の一部か 波頂部下の口縁部にくぼみ有		
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：ナデ調整後、ヘラ描沈線文有		
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：ヘラ描沈線文有		
8	縄文土器	-	-	-	-	-	B	破片	貫通孔のある突起の一部か？		
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：ヘラ描による平行沈線		
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：ヘラ描による沈線文有		
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：ヘラ描による沈線文有		
12	縄文土器 甕か？	-	-	-	-	-	B	破片	外面：櫛描による乱描 羽状文（3本1節）		
13	縄文土器 甕	-	-	-	-	-	B	破片	外面：櫛描による沈線文（3本1節）		
14	縄文土器 甕？	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：櫛描による沈線文（3本1節）		
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：ヘラ描による平行沈線文 その間に刺突痕有		
16	打製石斧	最大長	8.4	最大幅	5.1	最大厚	1.7	重さ	100.2 g		花崗岩
17	打製石斧	最大長	(6.1)	最大幅	(6.4)	最大厚	(1.6)	重さ	63 g		凝灰岩
18	石製品 すり石？	最大長	(6.0)	最大幅	4.0	最大厚	2.9	重さ	107.0 g	側面：敲打痕有	砂岩



第 21 図 遺構外出土遺物

V 調査のまとめ

今回の賢木岡東遺跡の発掘調査では、V字型の谷地形の斜面地の調査であり、過去の人々の痕跡が、この傾斜地まで及んでいることが分かった貴重な調査であった。

しかしながら、住居跡の痕跡は皆無であることから、当時より集落は谷の上部である現在の国道407号、県道沿いの位置であったことが推定される。特に今回の調査の多くの遺物はその集落からの流れ込みであろうと思われる。

調査区に隣接する沼（真澄沼）は谷地形の底部に位置し、当時から豊富な水を湛えていたと考えられ、土坑から出土した石錘はそこで漁撈の際に石錘を使用したことが想像できる。共伴した遺物が縄文土器であることから、その当時から周辺の地形、環境はほとんど変化していなかったことが、この遺物から窺い知ることができる。

また、遺構では第1、5、6号土坑は土取り遺構であることが確認できた。当時の土取りは土器制作に用いられることが推定できる。調査箇所地点の南300mには、大谷瓦窯跡が確認されており、こちらは瓦造りであるが、土器制作の技術が瓦造りへと派生していったことも可能性の一つとして考えられ、今後の研究資料として成果を得ることができたといえる。

引用・参考文献

『熊谷市史』前編 熊谷市 1963

吉野 健 『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡総括報告書Ⅰ』－西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅲ－熊谷市教育委員会 2013

金子正之 『石原古墳群第2号墳』熊谷市石原古墳群調査会 2008

蔵持俊輔 『上之古墳群・諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会 2013

写真図版

図版 1



調査区全景（南西から）



谷状遺構B - B' 付近（南東から）



第 1 号土坑 土取り遺構（西から）



第 1 号性格不明遺構 土層断面（南東から）



第 3 号溝跡（西から）



第 1 号性格不明遺構（西から）



谷状遺構 手前部分（北西から）



第 1 号性格不明遺構 土層断面（南東から）

图版 3



第8图 2-1、3-1・2・3、4-1



第11图 1-1・2、4-1



第11图 4-2



第17图 1~8



第20图 1~7



第21图 1~8



第21图 9~No. 15



第21图 16~18

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かたぎおかひがしいせき							
書 名	賢木岡東遺跡							
副 書 名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻 次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	第 33 集							
編 集 者 名	腰塚 博隆							
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所 在 地	〒 360 － 0107 熊谷市千代 329 番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦 2019（平成 31）年 3 月 27 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")			
かたぎおかひがしいせき 賢木岡東遺跡	埼玉県熊谷市青山字 賢木岡東 157 番 2	11202	59-092	36° 07' 53"	139° 40' 91"	20170427 ～ 20170601	287.6	記録保存の ための調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
賢木岡東遺跡	集落跡	縄文時代 中期 奈良、平安 時代	溝跡 4 条 土坑 6 基 (土取り遺構 3 基) ピット 27 基 谷状遺構 1 箇所	縄文土器・土師器		谷状地形の斜面部における 土取り遺構、谷地形の状況を 確認できた。		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第33集

賢木岡東遺跡

平成31年3月27日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／大屋印刷株式会社